

第三は衛生上の問題である。洪大無邊の日光も工場までは十分に照らしてくれず、風も通らず、空氣は腐り、塵埃は漂々と立昇り有害斯は室内に立罩る。殊に紡績工場などへなれば雪のやうな綿埃が鼻からさいはず口からさいはず遠慮會釋も無く侵入して来る。既婚婦人にあつては流产、死産の危險の多くなるは勿論、妙齡の婦人は茲に忌はしき工場病である肺結核菌の傳食となるのは當然の事である。否、寧ろそうならぬのが不思議である。當局者の調べに依る工場に於ける女工死亡者千人中三百五人までは肺結核、百二十九人は肺結核の疑あるものであつたといふ多くの寄宿舎では兩番使ひと稱して一枚の煎餅浦團と掛蒲團に晝夜交代に二組の女工を寝させてゐるものを見るが之等は明かに病毒の傳播を早やからしむるものと云はなければならない。

尚此外に注意すべき事は徹夜業の女工の體量に及ぼす影響である。明治三十四年八月農商務省で某紡績會社女工八十人に就いて調べた處に依る。最初一人平均七貫百七十六匁あつたものが夜業一週間の後には一人平均百七十匁の體量を減じたといふ事である。併し此減量は後日の晝業に依つて補はれるかといふに然うではない。其時の調べでは晝業五日後に恢復した量は確かに六十九匁で差引百一匁の體量は永久の損失となるのである。斯くて十週間夜業をするすれば一貫百匁、百週間すれば十貫匁の減量を見る譯である。女工が永く勤続する事の出来ないのは婚姻關係に依る事も無論だが、斯うした事もその一原因をなしてゐるのではあるまいか。